

「北清の森」で小屋のある広場から深雪をこいで斜面を登る恵庭幼稚園の子どもたち



自然体験で尻滑りを楽しむ恵庭幼稚園の子どもたち (いずれも小室慎撮影)

環境保護やさまざまな体験を通じて生きる力を育む観点から、自然体験を重視する「自然保育」が注目されている。道内でも取り組む幼稚園や保育園が少なくない。恵庭幼稚園(恵庭市)などを運営する学校法人リズム学園は、学びに適した森を地域と共に整備運営し、各地から視察が相次ぐ。昨秋には日本自然保育学会の研究大会が道内で開かれ、同園が見学会場となった。

斜面の雪かき分け尻滑りに歓声

森で遊ぶ 全身で学ぶ

同学会にもよって「自然保育」は、自然環境や地域資源を活用した体験活動を重視する保育や幼児教育、子育て支援を指す。実施団体を認める団体もある。同大会実行委員長・札幌公立大短期大学部保健科の田中佳幸准教授によれば、道内では90年代から自然学校などの体験型環境教育が盛んだった土壌があり、近年、幼児施設で導入が増えている。森を購入するなど大規模な活動や地域との連携が特徴だと言。



恵庭幼稚園の自然保育 不快さ、怖さ 危険知る力に

1月中旬、大雪の翌日も体験が行われた。「雪が積もって川と岸の境目が見えないから近づかないでね。落ちてぬれたら、ずっと火のそばにいないといけないよね」。年長児約60人にスタッフが注意を促す。森は「くさくさ」ほどの深さの小川が流れ、ツリハウスやたき火ができるあずまやがある。「どうして川は凍らないのかな?」氷に比べる水が温かいんだ。「園は自然の仕組みを学びながら慎重に一本橋を渡り、腰まで雪をかき分けて急斜面を10分ほど登る。何人かお尻すり降りると滑りが良くなり、はしゃぐ声が響いた。

井内学園長は地域性に合った自然保育が必要とも指摘。例えば北清の森には木に等る足場やプランコがあるが、同園が胆振管内安平町と連携して運営する、同町内のはやみき子ども園の森では、遊具をすべて取り去った。街中に住む親子には森に親しむ仕掛けがあった方が足を踏み入れやすいが、森に慣れている安平町では遊具がない方が森そのものの面白さに目が向く。「自然体験への入り口やプロセスは子どもや保護者によって異なる」と言う。

研究大会では道教大岩見沢校の能條歩教授(地球環境科学)が講演。学校教諭は実践して研究論文を書く人もいるが保育者は少ないとし、研究発表を通じて「蓄積する中からもっと素晴らしい教育課程が生まれるのではないかと話した。また、苫小牧市と同管内厚真町で親子向けの活動などを行うNPO法人「森のこころね」の松山道子代表理事も登壇。クラウドファンディングによる森の購入や、0歳児から土に親しむ様子を紹介した。(山田芳洋子)